

会報

大学生協友の会



2022年11月4日

第36号

発行:大学生協友の会

〒166-8352 東京都杉並区和田 3-30-22 全国大学生協連役員室 TEL 03-5307-1111
E-mail: unicoop@univcoop.or.jp ホームページ <https://unico.itigo.jp/>

大学生協友の会 秋の親睦会のご案内

友の会幹事長 伊野瀬十三

友の会皆様におかれましては恙なくお過ごしのことと存じます。

今年に入りここまで高橋晴雄さん、本田偲さん(法政生協OB)、遠山孝治さん(慶應生協OB)、会員以外では山田信良さん(法政生協OB)、川口宏さん(千葉大生協OB)が死去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。高橋晴雄さんにおかれましては友の会会長(現在は幹事長)を歴任されましたが、現在追悼文集発行の準備が進められており、友の会として投稿やカンパの協力を呼びかけていますのでよろしくお願いいたします。

コロナ第七派は鎮静化しつつありますが、今冬にはインフルとの同時流行が予測されています。しかし、依然として検査体制、医療体制に不安を残しています。政府、自治体には今度こそ危機対応に万全を期してほしいと思います。

さて国内政治においては、多くの国民が反対した国葬の強行、旧統一教会と自民党とのズブズブの関係、大物政治家の関与も噂されている東京オリンピック疑獄、そしてア

ベノミクスの後遺症ともいえる円安、物価高によつて岸田内閣の支持率が急落しています。何らの打開策を持てない自民・公明政権は最早限界だといわざるをえません。

一方、国外ではロシアのウクライナ侵略が長期化する中、このところのウクライナの反転攻勢によつて、ロシアの核兵器使用が懸念されています。話は少々飛躍しますが、地球温暖化による気象変動から世界各地でこれまで経験したことのない大洪水、干ばつ、猛暑、大寒波、巨大台風、ハリケーン、竜巻などが起きています。まさに、人類滅亡の危機がそこまで来ていることを感じさせられます。そのような中で、戦争や紛争、威嚇や挑発を国家間、民族間でやっている場合ではないことを為政者達は自覚すべきです。そして、私たちも老体にむち打って、何らかの形で地球環境の保全や平和希求の取り組みに少しでも貢献していくことが大切だと思います。

ところで、コロナ禍のもとで厳しい状況にあった大学生協ですが、今年度に入り大学は通常授業・研究がで

きるようになり学生がキャンパスに戻りつつあります。今秋には、先輩たちが育てられてきた大学生協共済が、日本コープ共済連に事業譲渡されます。この譲渡金は大学生協「再生」の資金として大切に活用されます。大学生協「再生」にむけた役職員の奮闘に期待するとともに、友の会として引続き大学生協への応援をしてゆくつもりです。来たる12月3日(土)恒例の「秋の親睦会」を開催します。できる限りのコロナ対策をした上での有意義な交流の機会としたいと思いますので、是非ご参加ください。お待ちしております。

12月

友の会会員親睦会のご案内

日時:2022年12月3日(土)

午後3時~5時

会場:杉並大学生協会館 5階ダイニング

会費:2千5百円(新会員は無料)

※尚、親睦会の開催については大学生協連が感染状況を勘案して判断します。開催の中止や変更についてはメール、ホームページ、その他などでご連絡いたします。

同封のハガキまたはメールにて出欠や「近況」をご連絡ください。締切りは11月19日(土)

●同日午後2時~2時50分は第1回幹事会を予定しています。

高橋晴雄さんを忍ぶ

2022年10月 岡安喜三郎

この春、「ハルさん」と呼ばれ多くの方から親しまれた高橋晴雄さんが84歳の生涯を閉じました。2010年頃に動作のままならない原因不明の症状が出て、「封入体筋炎」と病名がたどり着くのに4年ほどかかったという筋肉にかかわる難病の中の難病の闘病生活を送られていました。何か生協のことや社会のことなどの言いたいことや話したいことがあると、電話のベルが鳴り、10分、20分と話をしていたのを思い出します。その時の声は大学生協連時代の質と何ら変わらず、難病に罹患しているとはとても思えない元気ででした。ですから、突然の訃報には驚きと虚しさが入り混じりました。別の難病の発症ということに命はかなさを感じます。

高橋さんは、1976年から1985年まで大学生協連専務理事として活躍されました。初代の杉本時哉さん、2代目田中尚四さんに続いて高橋さんは3代目です。気が付けば私の前までの専務理事の方々は皆鬼籍に入られているというのにハットさせられました。今では考えられませんが、高橋さんが連合会専務理事に就任した当時は、ま

だ悪しき「学生運動」の余波が残っていて、その一環で大学生協運動内部に暴力を起因とする非和解的対立が存在していました。その延長で大学生協連からの「九州の大学生協除名」が総会議決されました。それから被除名側が起こした「除名撤回」の裁判とともに、ほぼ毎年、総会には「抗議デモ」が来ると言う状態であったと記憶しています。（ちなみに除名状態は80年代を経て、1990年の和解・復帰をもって終了しました。）それはさて置き。

大学生協連は、当時東大生協理事長の福武直東大教授を会長に戴きました。そもそも東大生協でのお二人の関係は、東大闘争（紛争）の経験や『東大生協25年運動史』執筆などを通じて、年齢的に兄と弟のような感情が、少なくとも先生にはあったように、傍目には勝手ながら感じていました。それは今でも。

ともあれ、福武先生の連合会会長就任は、大学生協連にとっても高橋さんにとっても幸運でした。それは「学生生協から大学生協への転換」をリードするという点で明瞭です。福武先生は東大を退官される際、他

のお誘いを断られ連合会会長に専念されるという英断を下し、全国の大学や大学生協（少なくとも30大学）を歴訪したことが『大学生協をめぐる諸問題』といういわゆる「福武所感」へと結実するわけです。

高橋さんはそれらに同行し、大学生協の現状を大学当局者にも喋ったと思います。その点で「福武所感」成立の影の功労者です。

1970年代から各地の大学生協で教職員の参加が進み、各大学生協の教職員委員会の交流活動ができて来たことを踏まえ、高橋さんは大学生協連に教職員委員会の組織化を提案しました。同時に、それまでの連合会の「常任理事会―理事会」という2段階階決裁機構を「理事会」一本に切り替え、理事会の「形骸化傾向」を防ぐとともに、教職員理事の構成比を増やすこととなりました。各地で進んでいた「学生生協から大学生協」への運営的転換を大学生協連も図ったわけです。高橋さんのこの時代の最大のエポックは学生総合共済の発足でしょう。

【写真1】



1985年8月ICAセミナー大学部会
中央が高橋晴雄さん、女性はフィリピンの参加者

これは民間保険会社と学徒援護会が結びついて文部省肝いりで「学生共済」を企画していたことに抗するとともに、助け合いを名実とともに作り上げるものでした。

これは福武先生の奮闘と大学生協連への指揮が大きな中身なのですが、その後の成り行きを決めたのは、おそらく福武会長とともに行動し実感として蓄積した高橋さんだと思われます。高橋さんの思い出には国立大学協会とのやりとりが綴られています。

高橋さんには、旅行事業におけるISTC（国際学生旅行会議、国際学生証の発行元）への加入に思い出深いものがあると思われま。大学生協連のISTC加入に当たって学生組織の基盤のない団体が国際学生証の発行権を持つているという事態を覆す活動でもあった訳です。また連合会退任前の1985年8月、ICA（国際協同組合同盟）のアジア地区の生協セミナーの大学生協分科会の開催を引き受け（会場は当時の大学生協渋谷会館にて、【写真1】は中央の高橋さんの他、日生協の勝部さん、フイリピン女性参加者、大学生協スタッフの皆さん）、その後の大学生協連の国際活動の礎を築いたということもあります。

【写真2】は1992年のサハリンとの交流、高橋さんも参加しました。

そのような大学生協連の活動の改革に入っていた高橋さんの連合会専務理事後半の頃、すなわち80年代は、私は東大生協の専務理事を拝命していました。中野の旧大学生協会館に行つては、裏口から「プリモベラ」というレストランへと移動し、時には終電後まで議論をしていたこと、良くあることで中身はさっぱり思い出さないのですが、只議論に続く議論を楽しんで行つたこと、それだけが記憶に残っています。そのあとは高橋さんの元の家が東村山（と思う）だったこともあつて所沢の私の家まで何回となく高橋さんの自家用車で送つてもらいました。私はビールで酔つていても高橋さんは飲めないのです、大先輩をアッシーもどきにするという失礼に甘えていました。ということ、後任である私への運動路線の“継承”という点ではほとんど問題がなかったと言えます。

念のために言いますが、後任、”継承”というのは結果論でして、私は大学生協連に移籍する、ましてやその専務理事になろうということとは考えてもいませんでした。もつとも思ったとしても無理なことは無理なので、当たり前です。「プリモベラ」での論議はそれほど楽しかったし、私が学生時代に培った運動哲学が、大学生協の未来



1992年6月11日サハリン教育大学との交流の帰路
ハバロフスク市のアムール川岸辺で。対岸は中国

大学生協企画に高橋さん（中央）も参加されました。【写真2】

のあり方に合致していったのでしよう。1985年の3月に大学生協連のある常務理事からの話で当時の流れになったのだと、付け加えておきます。

最後に、私自身が大学生協の専務理事を経験した面から言いますと、大学生協の専務理事はリーダーシップを執る側面と、「神輿」としての活動の「代表者」の側面を常に持つていますので、高橋さんを忍ぶにはそれらが混在していることをお察しくください。

（2022年10月8日記）

近況をお知らせください

同封のハガキまたはメール（1面上部ヘッダー）にて事務局までお知らせください。近況報告は年2回発行しています。

また、短文では紹介しきれない「近況」やさまざまな活動などぜひ友の会会報への寄稿・投稿として事務局までお送りください。年4回発行している会報に掲載します。



uniconoop@univcoop.or.jp

スマートフォンをご利用の方は上記QRコードからメール、近況をお送りください。

「豊ヶ丘の杜」の植物開花確認に参加して

佐伯 享児

多摩市に住み多摩の植生や山野草に関心を持つ一人として、緑地維持管理のボランティア活動があることを知り、この活動に加わったのは、昨年

1月でした。入会した「豊ヶ丘の杜フレンジーサポーターズ」は、市の緑地である「豊ヶ丘の杜」で、ナラやクヌギなどの萌芽更新を促す伐採や下草刈りを行いながら2008年から160種を超える「草花」と「樹木」の開花日の記録を続けていました。

私はこの活動に刺激を受け、より詳細な植生管理を引き受けることにしました。そして昨年6月より「豊ヶ丘の杜植物確認の方法と管理のために」を提案し、植物の開花確認作業を始めました。

この作業は「豊ヶ丘の杜」で季節ごとに開花する植物の写真を撮影し、開花確認の報告書を発行し、写真をデータ化(植物名50音順、開花日順)し植物リスト(2008年からの確認一覧表、開花カレンダーの花暦)を作成するという作業です。

今年7月までの1年間に61回の確認作業をおこない50回の確認報告書を発行しました。

新たに開花を確認した植物は草本

86種、木本22種、合計108種になり、これまでに確認していた166種との合計が274種になりました。

この活動の目的として以下の5点を掲げました。①「豊ヶ丘の杜」の植生の実態を把握する。②希少種の保護と環境阻害種の除去に役立てる。

③多様な植生育成のための環境整備に役立てる。④多くの市民への広報に役立てる。⑤多摩市全体の植生管理事業に役立てる。植物撮影は基本スマートフォンでおこないました。

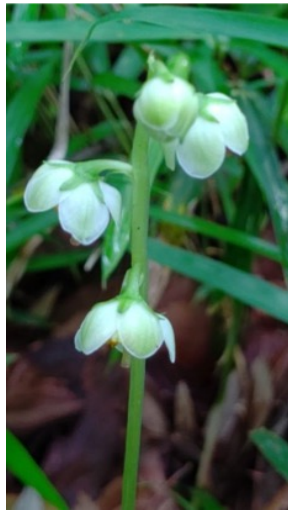
確認した植物の同定作業は、スマホアプリの「グーグルレンズ」、「多摩市の植物」(野草編・樹木編)で行いました。同定が困難な植物は多摩市グリーンライブセンターに相談しました。

今回の取り組みを通じて、「豊ヶ丘の杜」の植生が多様で、特有な植物が生育していることが判りました。他方で2020年から檜枯れの急速な進行が確認されました。コナラ全体で104本中、2020年に11本、2021年には52本が、またヤマザクラの立ち枯れも多数確認されました。

私にとってこの活動は、体力、気力の充実に大いに役立っています。又この杜に散策に訪れる多くの方との出会いとつながりができました。お会いした方からは、「この杜周辺は、私の散歩コース」「サクラやヤマブキなど季節ごとの花が楽しみ」「自分が育った田舎のような自然の環境があり、懐かしい」「どんな草花があるか知りたい」「どんな人たちが管理してくれているかよく知りたいが、ありがたいこと」などの声を寄せてくれました。「豊ヶ丘の杜」を大切に思い、親しみを持っておられることがよくわかりました。

写真データがある程度まとまったところで、団地の知人、グループに紹介する機会ができました。参加者は一様に豊かな植生に驚く一方で、半数の方が「豊ヶ丘の杜」の存在を知らないことがわかりました。また多摩市内にボランティア活動で維持管理されている同じような緑地が13か所あることが知られていないこともわかりましたので、四季の草花を紹介する取り組みを広げていきたいと考えています。緑地の維持管理に市民が関わっていくこうした仕組みにより、ご近所の人たちとの共同作

業としてつながりが広がりました。緑地に関わる楽しみが増え、健康増進にも役立っています。



超高齢化社会の課題に挑戦

亀井 隆

私は三郷市に住んで30数年となります。現役時代は、いわゆる「埼玉都民」で地元のことや行政などには全く関心ありませんでした。65歳でリタイア後、地元での生活がメインとなりました。趣味のマラソンのおかげで、地元のマラソンクラブにすぐに加入し一気に30名ほどの仲間ができました。

また、さいたま高齢協の組合員になり、組合員仲間と三郷市の高齢化の状況や介護事業所やサロン活動などを調査し、さいたま高齢協の新規事業を起こせないか検討してきました。

昨年(2021年)9月に三郷市社会福祉協議会から声がかかり、「早稲田地域を語るワークショップ」(早稲田はJR三郷駅の北側の地名、元早稲田村)のメンバーとなり、地元の自治会、民生委員、NPO、老人クラブ、介護予防サロン等の方と「老後を安心して暮らせる地域づくり」をテーマに話し合いを半年ほど行いました。

そして、三郷市社協とワークショップの共催で、「安心して暮らせ、楽し

い老後の人生を過ごせる地域づくり」をテーマに福祉講座を文化会館で開催しました。

ワークショップ終了後、地域の課題を解決していくために、引き続き参加メンバーを中心に連絡会を作り継続しようとして私から提案し賛同を得ました。名称は『楽しいシニアライフをめざす早稲田連絡会』としました。早稲田連絡会の最初のイベント企画は、映画上映会『老後の資金がありません』(天海祐希主演)で8月7日に開催しました。新型コロナウイルスで厳しい状況ではありましたが、感染対策を行い59名の参加で成功しました。

早稲田連絡会は月1回程度開催していますが、地域で活動する若い方もメンバーに加わり、活動メンバーが17名となりました。今後の活動は、12月に映画上映会「中村哲医師 荒野に希望の灯をともし」、2月に講演会(テーマは未定)、12月から高齢者向けスマホ教室を毎月1回開催の予定です。また、月1回「みんなの居酒屋」

企画でお酒を飲みながら交流します。
市民が自主的に地域課題を楽しみながら解決して行こうという取り組みは、三郷市社協からも注目されています。

最近、不思議な感覚になります。かつて、地域の生活問題を助け合いの精神で解決して行こうと活動してきた生協のポリシーを、行政も企業も「共生社会」などと同じことを言うようになってきました。

ロバート・オウエンが2000年近く前に、不況にあえぐ地域の問題を協同組合によって解決しようとしたことを今、行政機関までもが唱えるようになってきました。

資本主義社会でもなく、共産主義社会でもなく第3の道「協同組合社会」が近づいている気がします。

リタイア後の第2の人生を協同組合運動の前進のために楽しみながらチャレンジしようと考えています。
(現在、さいたま高齢協 副理事長)



あの時代、あの頃のこと〜私と大学生協 その④

大学生協友の会会員(2001年入会)・仲田 秀



【学生たちの平和運動と、組合員活動の理論化の工夫】

「平和活動は一人の想いをしつかり話し合って」

80年、被爆者援護法署名から原爆写真展を駒場、本郷、各支所で開催し、81年より16ミリ映写機を担いで「人間をかえせ」予言、82年上映会(82年度97会場、4344人)、バッジ、メッセージカード、反核講演会での交流を行いながら国連軍縮特別総会に代表を派遣した。この一連の運動の中で、「知る、知らせる、考え話し合う」活動スタイルを見つけ、春の組織部会で、平和講座に発展させる、平和講座は駒場学生委員会を中心に、学内外の先生に講師を依頼して進め、講演録をワープロで作成した。

そして、全国活動「知り、知らせ、考え話し合う」活動に発展した。「組織部会」という研究会を行う

80年11月4つの組織委員会(駒場学生委員会、本郷学生委員会、院生委員会、職員委員会)の委員と専従職員で構成する第一回組織部会を開催した。この組織部会は、課題の共有と協同解決の場として店舗における組合員との結びつきを強めるために開催され、理事長の問題提起講演とともに問題別分科会をもうけて研究しあった。その後、85年まで続く事業活動をテーマとする「総代交流集会」を開催し、また「一言カード」の取り組みについて東大生協から、全国に提起された。

各事業をテーマとした組合員視点で、各店舗事業をテーマとする総代交流集会で掘り下げた。これらの活動内容は生協ニュースに掲載された。東大生協における組織活動は、大変不十分な引き継ぎしか出来なかった。組織文化としての蓄積は満足なものではない。東大生協という組

織とそこで主体的に活動した専従職員や組織委員に蓄積された組織文化は多くが人を通して、そして文書を通して継承されるものであると考えていたので、不安を感じながら移動した。組織文化をどう繋ぐかは人が介在しない時にはとても難しい問題だった。

6 連合会教職員院生委員会担当の頃(1987年11月)

【オキナワへの旅と教職員院生組合員活動セミナー】(87年10月〜92年12月)

大学生協連での活動は教職員院生委員会の事務局に徹しており、その要請に応じて教職員院生活動の広がりを作るために動いた。はじめの5年間は、オキナワへの旅(秋)

と教職員院生セミナー(7月)を準備しながら、全国各地域の地域各種理事会・委員会に教職員委員長、会長理事に同行した。

全国教職員・院生委員会のこの時期の記録は教職員セミナーの記録はレジメ、開催記録ともに残された。

また連合会発行の「教職員院生委員会情報」で全国的に紙面交流が出来るように取り組んだ。オキナワへの旅はピースナウ学生企画の教職員版として企画された。

ソ連崩壊の直前89年から、大学生協連はサハリンのユージノサハリンスク教育大学の学生・教職員との

交流を開始した。北大の竹田先生の紹介で経済学者朴先生との繋がりを通じて実現した。突然訪ねた女性二人に、訪問先の朴先生からの鋭い眼光を感じて、意図を尋ねられたのを覚えている。ただ、ただ交流したいのだと伝えると表情が変わり歓迎され、その後も行き来でき、ソ連崩壊後も継続できた。5〜6年続けられた。

連合会における教職員院生委員会活動(1987年11月〜1993年1月)の継承は不十分だった。後任への引き継ぎは整理出来ず、教職員院生委員会情報の合本として、連合会と各地連に残しておくこと位しかできなかった。

【PCカンファレンスとCIECの結成】(93年1月〜96年3月) 教職員院生組合員活動として、コンピュータ利用教育を位置づけ、大学生協が主催するPCカンファレンスを開催した。一年がかりで、開催大学の教職員をしつかり抱え込む学会的な活動として準備した。大学キャンパスを借用しての企業の展示参加と学会の年次大会を一緒にした内容に近かった。お金のかかる費用は企業協賛でまかない、労力のかかる作業は大学生協職員が携わった。

次号へ続く